

古事記・目弱王の乱にみる安康像と雄略伝承

森 昌 文

一

古事記下巻・安康記の物語は、(一)押木の玉纒、(二)目弱王の乱、(三)市辺之忍齒王の難、の三篇から構成されており、うち(一)は(二)の導入部にあたり、(三)は次期皇位継承者と目された有力ライバル市辺之忍齒王を退け、雄略の即位すべき事情がととのったことを示す終章譚である。(一)、(二)にみる安康の行為は雄略の武力的英雄像を克明に描き出すための伏線にすぎず、安康記自体が雄略の即位前紀的役割を果たしていることを意味する。

表題のとおり、小論では(二)目弱王の乱を軸として論をすすめていくわけだが、まずは事件の経緯を述べよう。

(一)押木の玉纒によれば安康は若日下王を同母弟、雄略の皇妃にさせようと坂本臣等の祖、根臣を若日下王の兄、大日下王の許に遣わせるが、私欲をおこした根臣は禮物「押木の玉纒」を奪い、讒言して大日下王の拒絶を安康に告げる。激怒した安康は大日下王を殺害し、王の嫡妻、長田大郎女を皇后として召し入れた。こ

うした事情から(二)目弱王の乱がひきおこされ、実父の仇敵を察知した目弱王が安康を殺害し、都夫良意富美の許へ逃走したと言

う。

この事件は古事記のなかで異例である。歴代巻のうち、天寿をまっとうせぬうち崩御した天皇は、新羅征討の折、神託を無視した仲哀とこの安康のみである。しかも安康の場合、臣下による暗殺という、天皇家の威信を失墜させる極めて異常事態を告げる死であった。

この特異な現象をもっと考えてみる必要がある。たとえば安康記の記載方法であるが、通例、古事記歴代巻はまず以って后妃皇子女という系譜を載せる体裁をとるが安康記に限りこれを欠落させている。

すなわち同記冒頭部は、「御子、穴穗御子、石上の穴穗宮に坐しまして、天の下治らしめしき。天皇、伊呂弟大長谷王子の為に、坂本臣等の祖、根臣を、大日下王の許に遣はして、――。」ではじまるのであり、「皇子」の普通名詞として「御子」が用い

られることはあるが、即位してなお「御子」と記す天皇もまた安康のみであるという。さらに「天の下治らしめしき」のあと、「天皇、伊呂弟大長谷王子の爲に」とあるよう物語の主題が安康からそれ、雄略の事蹟をかたることに筆をいそぐ。

先の目弱王による安康暗殺のあとを承けて、古事記は雄略の少年英雄譚を載せ、雄略による目弱王誅伐、都夫良意富美の自害（書記では焼殺される）を語る。述べたように、安康記は雄略が武力英雄を以て目弱王・黒日子王・白日子王・都夫良意富美・市辺之忍齒王を殺戮しながら次期皇位継承者として即位に到った次弟を透視させるところに主眼があり、安康自身の固有の物語はない。いわば、雄略の英雄像を造型するために、目弱王の乱という反逆譚が用意されたとみられないこともない。

このような安康記の特質を勘案しながら、以下、当反逆譚について天皇の行為を中心に私見を述べることとする。

二

まず第一に、何故安康は暗殺されねばならなかったのかという疑問がある。この疑問に対する見解として従来より二説がある。

安康の同母姉、長田大郎女と大日下王の嫡妻、長田大郎女が同一人物であったと捉え、けっきょく安康は同母兄、軽太子と同様禁忌を犯したのが、のため殺害されたのだという見解と、冒頭部に「天皇神牀に坐して昼寝したまひき」とあるとおり、神聖な「神牀」で昼寝をしたことに対する神罰觀面譚の見解をとる両説である。

前説の近親相姦説であるが、記・紀が軽太子のように禁忌について一言も触れていないこと、また雄略即位前紀の分注に、安康の皇后を「去来穗別天皇の女、中帯姫皇女と曰す。更の名は、長田大娘皇女。大鷦鷯天皇の子大草香皇子、長田皇女を娶きて、眉輪王を生めり。」と、履中の皇女とことわっていることからいまいひとつ説得力に欠けるといえよう。また後説の「神牀」で昼寝をした行為であるが、『記伝』は、「此時何事にまれ神の御命を諫賜ふこと有て、神牀には坐けむに、其斎を怠りて昼しも后と御座坐むは甚有まじきわざなるを、此天皇は大日下王の妃を取来て后とし給ふが如き、不義の御為もあれば、此も此后を深く寵賜ふまゝりに、御物斎をも犯し賜へるにて、此時所念かけぬ害に遭て崩坐ぬるは、神の御咎にやありけむ。猶よく考ふべし」と述べ、確答を保留しつつも「神牀」という場に視点を置いた捉え方であり、一考すべき見解であるように思う。

ところで、目弱王の乱は内実は復讐譚であるが、巨視的に捉えるならば、古事記内に散見する、媒の者が忠義を忘れ謀叛をおこすという一連の反逆譚の類型であり、この場合、根柢から端を発した謀叛が進展し、目弱王に到って天皇殺害という一大事がある。実父の仇討ちとはいえ、天皇殺害は理由の如何を問わず謀叛であり誅伐はまぬがれない悪事であった。

ここに古代王権を支える正の論理へのすりかえがみられるが、要は、天皇殺害者、あるいは謀叛者を誰がどのような手段を以って誅伐し次期皇位継承者として即位したかに物語の力点がある。しかし同時に、古代史上唯一、天皇暗殺という火急な事態

は、何らかの意味で安康が否定されたことをものがたるとみても大過はなさそうである。

考えられるのは仲哀と同様、やはり神事的なものを無視したところと否定された起因がある筈であり、宣長がこだわった「神牀」についていまだ少し検討しておこう。

三

古代文獻にあらわれる「神牀」の用例については、当段以外、崇神記・疫病流行の折にみる一例のみが検出される。

「此の天皇の御世に、疫病多に起りて、人民死にて尽きむと為き。爾に天皇愁ひ歎きたまひて、神牀に坐しし夜、大物主大神、御夢に顯れて曰りたまひし、——。」とあって、大物主は意富多多泥古を以て自分を祭るよう命じ、そうすれば疫病もなくなり国内も平安になるだろうと告げた。天皇は大物主の命ずるとおりのことをして事無きを得たという。

この用例によると、「神牀」に就くのは「夜」であり、そこで「夢」をみることによつて神託を得られる場であるらしいことが推察できる。西郷信綱は、神武紀東征譚にみる、「是夜、自ら祈ひて寝ませり。夢に天神有りて訓へまつりて曰はく、崇神紀四十八年、「汝等二の子、慈愛共に育し。知らず、曷をか嗣とせむ。各夢みるべし。朕夢を以て占へむ、とのたまふ。二の皇子、是に、命を被りて、淨沐して祈みて寐たり」等の例をひきながら古代に於ける「夢」について次のように考察している。すなわち、一定の祭式的手続きをとることによつて得られる夢は、王制がも

つとも必要とした政治的武器となるのであり、「神牀」に寝るということも「夢」を得るための祭式的行為であつたとする。⁶⁾

神牀→寝る→夢→託宣、という図式で示される西郷の捉え方は、古代王権の内部構造をさぐる一方法として卓見であり首肯できるものとみられる。しかし「夢」というものが右のような図式で捉えられたとしても、校異に異同がない目弱王段の「神牀」が、プロット上齟齬をきたすという理由で「神」を誤字とする氏の見解には異論の余地があろう。

そこでいまだ少しく孤語に近い「神牀」なる用語の意味する場を確認しておこう。さしあたり、記・紀に多く用例をみる「床」という語を検証の対象にすえてみるしか方策はなさそうである。

「床」の本字は「牀」であり、「床」はその略字にあたるのだが、いま記・紀の中からおおざっぱに用例を挙げてみるならば、「朝床」「床前」「床辺」「具床」「玉床」などがある。

「床」は、「寝台・こしかけ」「ゆか・とこ・すのこ」の意で、「屋内に棧を設け板を張り、人の坐臥するところ」(『大漢和辞典』)とあるが、このうち「明日の夜、太子、仲皇子の自ら好せることを知しめさずして到ります。乃ち室に入り帳を開けて、玉床に居します。時に床の頭に鈴の音有り」(『履中即位前紀』)は「寝台」であるらしく、また「やすみしし 我が大君の 猪鹿待つと 具床に座し」(『雄略記・歌謡』)、「爾に即ち小櫛連聞き驚きて、床より墮ち転びて、其の室の人等を追ひ出して」(『清寧記』)などは「こしかけ」とみられる。しかしながら次の用例からすると、「床」は単なる日常性を帯びた調度のたぐいとは趣を大きく異に

する。

(A)「其の矢を取りて、其の矢の穴より衝き返し下したまへば、天若日子が朝床に寝し高胸坂に中りて死にき」(古事記上巻)、
(B)「爾に其の美人驚きて、立ち走り伊須須岐伎。乃ち其の矢を將ち来て、床の辺に置けば、忽ちに麗しき丈夫に成りて」(神武記)、
(C)「赤土を床の前に散らし、閑蘇紡麻を針に貫きて、其の衣の欄に刺せ」(崇神記)、(D)「故、其の賤しき夫を赦して、其の玉を將ち来て、床の辺に置けば、即ち美麗しき嬖子に化りき」(応神記)。
(A)は高天原の使者として復命しなかつたアメノワカヒコがタカミムスヒの返し矢に当たり死んだ場面であるが、書紀には同条、「于時、天稚彦、新嘗休臥之時也」とあり、「朝床」は褻の場ではなく祭儀を伴った公的な場であることを伺わせる。後にアヂスキタカヒコネをみてアメノワカヒコが生き返ったという展開につながるように、「朝床」は死と再生をかたる通過儀礼的要素を内在していたものと思われる。(B)・(C)・(D)は、それぞれ山城国風土記逸文にもみえる丹塗矢伝説、三輪山伝説、アメノヒホコの渡来伝承にみる日光感精卵生神話であり、神人通婚の場、ないしは神の子、貴子生誕の場であつてやはり通常みられるような「床」ではない。また天孫降臨の際、タカミムスヒはニニギノ命に所謂「真床覆衾」なるものを着せたとあるが、「覆衾」が物忌みの為のもの、あるいは子宮の暗喩であるかはしばらく措くとして、「真床」が大嘗祭に於ける王の即位式の反映であり、嘗殿中央に設けられる「神座」のことを暗示しているものと思われる。

これらのことから、記・紀にあらわれる「床」の占めるウエイ

トは、日常的なものよりもむしろ日常性を越えた場での用法にこだわってみるべきであつて、当該「神牀」を「御床」にあらためたとしても神事的な場である印象を払拭しきれない。

その「神牀」を昼寝がわりにし、后と愛を語り合つた天皇はやはり否定されるべき行為であつたらう。しかしそれにしても神罰観面譚とするには唐突でそつけない語り口になっているのだが、この否定された安康の行為を考えるにあたり、書紀・靈異記にみる雄略伝承は実に多くの示唆を与えてくれる。

四

小子部栖輕は、泊瀬の朝倉の宮に二十三年天の下治めたまひし雄略天皇の隨身、肺腑の侍者なり。天皇、磐余の宮に住みたまひし時、天皇、后と大安殿に寐テ婚合したまへる時に、

栖輕知らずして参る入りき。天皇恥ぢて轍ミヌ。(以下略)

右に引用したのは、『日本靈異記』上巻・第一・「雷を捉ふる縁」の冒頭部である。このあと天皇の勅命をうけて栖輕が雷を捉える話になるのだが、注目したいのは后と婚合していた場が「大安殿」であり、「栖輕知らずして参る入りき」とあるよう、おそらくは昼に於ける行為であつたらしい点である。

「大安殿」は、天武十四年九月「王卿等を殿の前に喚して博戯せしむ」、朱鳥元年正月「諸王卿を喚してトヨノアカリ賜ふ」、同年二月「侍臣六人に勤位をさづけたまふ」などがみられ、内安殿が天皇の日常生活を営む内裏後殿であるのに対し、外安殿・大安殿は大極殿の前身であり、公的行事の場ともなる内裏前殿に相当

するものであったといふ。

この眞昼に於ける天皇の婚合を農業生産の向上と結びつけて考える説があるが、「恥ぢて」との關係から妥当でなく、この場合「大安殿」という政務を行う公的な場での婚合に話の焦点があると思ふ方がよい。

さて、この靈異記にみられる「大安殿」での昼最中の婚合という話を、先の「神牀」と照らし合わせてみると、伝承内容は大同小異であり、天皇の行爲としては軌を一にしている。これらの伝承が語るところは、つまりは好色、且つ秩序への無視をものごたることを意味するとみられる。しかも重要なことは雄略（時代）にのみその伝承が残っていたという点にある。スガル（栖輕）伝承を語るには后との婚合場面を載録する必然性はなく、雄略個人にまつわる后との伝承が如何に根強いものであったかを逆証していることにもなるであらう。

古代の英雄、雄略とは一体どのような人物として語り継がれていたのでしょうか。

古事記の雄略像は、安康記には即位に到った次第を語る武力的英雄像が一貫して描出されていることは述べたが、雄略記にいたっては歌謡を中心とした愛にまつわる話が目立つ。若日下王、吉野川の浜の童女、袁杼比売に対する婚合に紙幅の多くをついやし、また引田部の赤猪子には雄略の慈悲深い姿が強く顯証されている。葛城山の一言主神との対決、豊楽の際の伊勢国三重塚の粗相に対する激昂があるが、いずれも謝罪ないし、放免という態度をとり、「武」からはなれ雄略の人間的な面を多分に表出してい

る。

いわば、即位前には「武」、即位後は「愛」という書式をとるが、これは大王伝承を語るに際しての古事記下巻の特有の書式であるらしい。たとえば、仁徳の場合がそうである。仁徳の即位前紀的記載は中巻・応神記にあるが、応神が召そうとした髪長比売を自己の后とし、「品陀の日の御子 大雀 大雀 佩かせる大刀」と吉野の国主等にその勇姿をうたわれているが、即位後の仁徳記には、太后石之日売の嫉妬譚を中心に黒日売・八田若郎女との愛をめぐる歌謡物語に終始していて庄巻である。

仁徳と雄略にはそれぞれ宇遲能和紀郎子、市辺之忍齒王・黒日子・白日子という次期皇位継承者となるべき人物がいたが、結局のところこれら有力ライバルを退けての即位ということで共通している。ただ雄略は仁徳よりいっそう猛々しい武勇力を發揮しての即位という点で相違があり、またこの点に他に類をみない雄略の固有する問題があるのだが、応神記・仁徳記と安康記・雄略記の対応とで考えれば俯瞰図としての書式は変らない。儒教の影響を強く受けながら、古代史上エポックをなす新政権に対し「武」、「愛」を兼備した屈指の有徳天皇を潤色するところに基本的な古事記の編集態度がみられる。克明な即位前紀的記載のこだわりは、兄弟相承という五世紀に於ける皇位継承法への強い認識のあらわれでもあった。

一方、書紀の場合はどうか。統一された古事記の雄略像に対して、書紀の雄略像は背反した両極の面を浮きぼりにしていることは既に周知のとおりである。すなわち雄略紀二年十月

「大だ悪しくまします天皇なり」、同十一年十月「悪行まします主なり」が一方の評価であり、同四年二月「徳しく有します天皇なり」が他方の評価である。前者では「心を以て師としたまふ」あまり、誤って人を殺すことが多いといひ、また鳥官の倉菟田の人の狗に食い殺された為、管理不行届で諫面に処したことがその原因であるという。後者は葛城山で一言主神と狩猟を相譲りあひながら共に楽しみ、「轡^{わづらひ}を竝べて馳^は騎^り」し、「仙に逢ふ若き」であつたことがその原因とされている。

論の展開上、いま問題にしたいのは古事記には記載されない前者の否定されてた雄略像である。

大津馬飼をはじめ、書紀には百済の池津媛・吉備下道臣前津屋など、残忍極まる雄略の殺害記事が実に多い。それはとりもなおさず、「心を以て師」としたがための行為なのであつて、自己の荒々しい感情、ないしは力の論理に訴えたデスポチズムのあらわれであるに違ひない。こうした自己の本能による行為は時として神の怒りをおこすことになる。

さきの靈異記スガル伝承とはほぼ同様の伝承が雄略紀七年七月条にも記載されていて、それによると、三諸岳（三輪山）の神（大物主神）である大蛇をみた雄略は「斎戒」しなかったために雷光を降せられ殿中に逃げかくれたという。胸方神を祠り、神託に従い新羅征討を断念するという恭順さもみられるが、歴代天皇と極めて異質な「心を以て師」とする雄略の固有伝承は人事面のみでなく、祭政一致の古代王権構造から逸脱する行為がままたつたという伝承を語っていることを示唆する。さきの「神牀」「大安殿」

での昼寝は書紀にみる雄略伝承にかんがみればおおいに符合するところであつて、「神牀」にまつわる目弱王段も物語の祖型をたどれば、安康自身の伝承というよりは雄略に密着した伝承であつた可能性をうかがわせる。

五

可能性を蓋然性にまで高めるには、昼最中からの共寝という好色的側面の追究へと論をはこんでゆかなければならない。書紀をみると、やはり通例を越えたその種の記事が雄略の人となりを見せている。

雄略紀二年十月、大津馬飼斬殺のあと、人臣の動揺緩和のため皇太后・皇后は采女日媛を迎え入れたが、喜んだ天皇は「朕、豈汝が姁^{あは}咲を觀まく欲せじや」と述べ、媛と手に手を取り後宮に姿を消したという。これによると、人臣の安寧秩序をはかるには雄略の激情を鎮めなければならないが、それには端麗温雅な女性を供奉させるのが最良の方法であるということと周囲にいた人間たちには心得ていたらしいことである。また同七年是歳の条には次のような記事が載せられている。

吉備上道臣田狹の妻、稚媛（別本に毛媛とある）が美麗であることを密かに聴き込んだ雄略は、稚媛を皇妃にしたが、それを知つた田狹は子、弟君に事の経緯を語つて聞かせ、近い将来天皇に災禍がおこるであらうことを告げた。忠誠心の強い弟君の妻、稚媛は事態の重大性を知り、国家に対する謀叛の兆しがあると考へて弟君を殺したと伝えている。この話、実は任那国司田狹と新羅

征討に派遣された弟君との間で、天皇へのうらみを晴らさんがために新羅・百済と通じて日本をあざむこうとする画策が働いているのだが、雄略の好色面もさることながら、相関図として目弱王譚と類似する。安康・雄略は共に人妻を娶り、先夫の子が謀叛をおこし誅伐にいたる。大きな相違に、安康は大日下王を殺害したが、雄略は田狹を殺害しなかった点がある。但し、この記事には異文があり、それによると雄略は田狹を殺害し、弟君は百済より漢手人・衣縫・宋人らを連れて帰朝したとあって田狹・弟君父子は国家への謀叛を企図していないと伝えている。山尾幸久はこの別本の記事が史実であって本文は改変物語化されたものと扱っているが、五世紀中葉より六世紀にかけての一連の吉備氏反乱伝承の導入部ともなるべき当譚は、要するに田狹の妻を奪う雄略の行為が発端となるであって、雄略の本質の一面が事件の肥大化をすすめていることにはかわりはない。

安康が大日下王の心情を把握することができず誤って殺害したのも、結局は先にみた「心を以て師」とする雄略伝承の反映であるとも考えられるが、いづれにせよ目弱王の物語構成を考える上で雄略紀七年の記載は無視できない特筆すべき事件であろう。雄略が田狹を殺害しなかったとしても、何故安康は大日下王を殺害せねばならなかったのか、また暗殺されねばならなかったのか。それは全て雄略をスムーズに皇位に即かせるといふ働きに起因する筈である。即位後の天皇行為に於ける是非はともかく、即位した事情に妥当を欠く一切の不当性、不経性は排除せねばならないことが古事記の一貫した立場である。皇位を兄弟で相承してゆく慣

習が基本型であった当時、しかも長幼の序列の極めて厳格であった倭の五王期の皇位継承法に於いて、黒日子・白日子両兄を飛び越えて雄略が即位するには、それだけの大義名分が要請される。即位するに際してあまりにも多い雄略の斬殺記事は（たとえ雄略の少年英雄譚を語るにしても）不審をまねく材料だけが架上される結果となろう。

目弱王の乱によって何が得られたか。それはとりもなおさず、黒日子・白日子両王、目弱王、都夫良意富美を亡き者にしながら同時に、雄略に即位すべき正当性を付与する構成が明瞭に看取できるのであり、武力で即位したのであらう雄略としてその例外ではなく、古代王権の論理を踏み越えるものではなかったと言えよう。皇位継承法にみるこのかたくななまでもの不当性、不経性の排除、また序列遵守というものが、古代王権に於ける「正」の論理と呼べるのなら、その論理によって隠蔽され、古事記の中で不問に付された伝承の母胎を読むことが必須の作業となるが、とりわけ雄略の場合、武断と好色の振幅が激しかった。古代屈指の大王として英雄視せねばならない事情と、否定されるべき要素を等閑視できない両極の伝承が、古代人の中に生き、そしておそくは克明に語り継がれていたと思われる。目弱王事件の流れの中にもみる安康の行為はその否定された雄略の側面を負荷させたものであり、そうすることによって、「正」の論理に雄略を封じ込めることが可能になったと言えよう。

「神牀」を私物化し、后と愛を語り合うという古代王権の論理から逸脱する安康の行為は、書紀・靈異記にみる雄略の固有伝承

と極めてよく類似しているのであるが、雄略紀十四年には「押木の玉纒」の後日譚が記載されている。大日下王が天皇に贈った禮物、玉纒を根使王（根臣）が肌身につけていたことを知った皇后は嘆き悲しむのだが、その時、雄略と皇后は共に「床」にいたとあるのも目弱王譚を考える上で暗示的である。

以上、述べてきたことは目弱王事件をひきおこすべく天皇の行為に視点を置いたものである。当反乱譚を形成する上で核になったものは安康自身ではなく、本来雄略にまつわる伝承なのであり、その一翼を担ったのは日下部氏であつたらう。

日向の諸君の女

髪長比賣

仁徳

葛城の曾都毘古の女

石之日賣

允恭

安康

雄略

長田大郎女

大日下王

目弱王

若日下王

『新撰姓氏錄』によれば同氏は、開化天皇の皇子、彦坐命（日子坐王）の後裔とされている。顯宗即位前紀には、雄略によって殺害された市辺押磐皇子（市辺之忍齒王）の遺児、弘計王（意祁王）・億計王（哀祁王）兄弟を帳内日下部連使主と子、吾田彦が助け、両王が播磨国赤石郡にいたるまで吾田彦は忠実に彼らに仕えたと記されている。赤石郡に入る前に經由した丹波国余祁郡は

浦島子伝説により日下部氏と密接な関係にある地だが、この皇位継承に関わる記事より同氏は允恭系の雄略派に対し、腹中系に位置していたことが推測される。

隅田八幡神社画像鏡銘にある「日十大王」を日下大王と訓む立場をとれば、当時一大勢力をはっていたその大王を亡き者にした専制君主は、雄略であつたのかもしれない。大日下王の遺児、目弱王を殺害した雄略は、即位事情を述べる古事記のカテゴリーから要請されたものであつて史実を避け、物語化されたものであることは言うまでもない。しかし、実母を天皇に奪われ、子が謀叛をおこすという物語構成は机上のフィクションであつたとも思われない。欽明朝の旧辞段階でその種の伝承がすでに広汎にひろまっていたのか、あるいは史実となるべき鮮明な事件が背景にあつたのかは断言のしようもないが、先の田狭・弟君事件、ならびに田狭の妻、稚媛とその幼子、星川皇子の反乱事件にみる雄略周辺に於ける一連の吉備氏反乱伝承は、目弱王譚の構成を考える上で大きな示唆を与えていることは否定できないであらう。

日下部連（氏）の遠祖はサホビコ王である。垂仁記のサホビコ・サホビメ譚は愛がからんだ反逆譚として庄巻であり、物語構成の上で目弱王譚と類似していることは既に指摘されているところである。小論は、目弱王譚→サホビコ譚へと論を発展させ、古事記物語に於ける雄略伝承の位相を追究しようとしたものが、後日稿をあらためて述べる所存である。

注（1） 吉井巖『ヤマトタケル』。歴史家の立場から水野祐は安康を非実在の天皇と扱っている。（『日本古代の国家形成』）

(2) 吉井巖(前掲書)は、允恭記に於ける輕太子追擊譚も本來は安康固有の話ではなく、雄略による都夫良意富美譚の反映であるとする。黒日子・白日子を残虐な手段で殺害する「当時童男」であった雄略の行為が、ヤマトタケル譚を形成する上で大きな影響を与えているであろうことを考え合わせると、古事記物語を構成する上での雄略の位置づけを確認してゆく作業はかなりの意義をもつものと思われる。

(3) 『古事記思想大系』本。青木和夫の補注。

(4) 『古事記伝』、『古事記集成』、『古事記思想大系』本は、同母姉弟の婚姻説とともに、神罰観面譚説をも認めている。一方、『古典文学大系』本、『古事記注釈』は、「神」を「御」の誤字とする立場をとる。

(5) 順宗記に、「大長谷天皇は、父の怨みにはあれども、還りては我が従父にまし、亦天の下治らしめし天皇なり、是に今単に父の仇といふ志を取りて、悉に天の下治らしめしし天皇の陵を破りなば、後の人必ず誹謗なむ」とある。

(6) 『古代人と夢』

(7) 折口信夫、「大嘗祭の本義」(『古代研究』民俗学篇二)

(8) 西郷信綱、「古代王権の神話と祭式」(『詩の発生』所収)。

(9) 同氏、「大嘗祭の構造」(『古事記研究』所収)
直木孝次郎、「大極殿の起源についての考察」(『飛鳥奈良時代の研究』所収)

(10) フレイザー『金枝篇』を引用する守屋俊彦。(『続日本書紀の研究』)

(11) 福島秋穂もスガル伝承と婚合場面との非関連性を述べている。(『小子部栖輕』、早大出版部『日本書紀異記』所収)

(13) 『日本古代王権形成史論』

(14) 古事記には「波多毘能大郎子、亦の名は大日下王。次に波多毘能若郎女、亦の名は長日比売命、亦の名は若日下部命。」とあり、記・紀に於ける「更名」の用例が別個の人物を同一人物とし、又別個の物語を統合する傾向があるという立場から、大橋信弥は、本来系譜的存在であった波多毘能大郎子・波多毘能若郎女に草香部吉士氏の祖先功業譚を付加するため、大日下王・若日下王という物語の主人公の名を「更名」として同一人物にしたと捉える。(『帝紀からみた息長氏』、『日本古代国家の成立と息長氏』所収)このことから目弱王譚を形成する上で日下部氏の積極的参加は否定できない。

(14) 神田秀夫、『古事記の構造』

新刊紹介

小林保治・高橋貢・檜谷昭彦編

『日本短篇物語集事典』

本書は、『日本の説話』シリーズの別巻として刊行された『説話文学必携』(昭51)

の新装改訂版であり、短篇物語集書目解題・短篇物語集研究書目解題・昔話研究の手引・説話文学原典所在一覧・短篇物語集書目年代順索引から成る。短篇物語集書目解題では、中世説話集を中心に基本的原典一〇八篇が選ばれ、それぞれに書名・成立・編者・内容・研究上の問題点・参考文献等について

て解説が付され、従来等閑視されることの多かった短篇物語集の手引き書として便利なものである。参考文献・研究書目解題・昔話研究の手引は、旧版発行後の新しい成果を取り入れている。

(昭59・10 東京美術 B6判 五二二頁 二八〇〇円) [仲井克巳]